

子どものための 文庫の手引き

小さな図書室を
つくりたいあなたへ

伊藤忠記念財団

東京子ども図書館

設立 50 周年記念協働製作

刊行によせて

もくじ

刊行によせて	1
子どもの身近に、小さな図書室を	2
家庭文庫と地域文庫	3
ある文庫の一日 ●家庭文庫編	4
●地域文庫編	5
1. 蔵書をそろえる	7
2. 運営	9
3. 活動の実際	12
園文庫	18
ある保育園の読み聞かせ／ある幼稚園の本の貸出	19
1. 蔵書をそろえる	20
2. 運営	20
3. 活動の実際	21
子ども文庫についてのQ&A	22
子ども文庫の歴史	30
本のリスト	36
赤ちゃん絵本	36
絵本 ●3歳～	37
●5歳～	39
ことばあそび	43
昔話 ●絵本	44
●お話集	45
物語	46
子どもと本をつなぐ方に、おすすめの本	48

おかげさまで、伊藤忠記念財団は2024年9月に50周年を迎えました。これもひとえに、当財団の事業に対する皆様のご理解とご協力のたまものです。

同年の1月に財団設立の認可を受けた東京子ども図書館と、少し後輩の当財団との関係は、非常に深いものです。同館は当財団の「子ども文庫助成」を初年度に受領されており、2001年から約4年をかけて「子どもBUNKOプロジェクト」（全国の子ども文庫の調査研究）をともに進めた関係もありました。

今回、お互いの50周年を記念して、新たに子ども文庫を始めたい方や文庫活動に関心のある方のための手引きをともに企画し製作しました。50年の歩みを経て、こうした協働事業を実施できたことを大変嬉しく思います。子どもたちを取り巻く環境が大きく変わる中で、この手引きができるだけ多くの方々に届き、家庭文庫や地域文庫、園文庫が各地に増え、未来に生きる子どもたちに本を届ける人の輪が広がることを願います。

公益財団法人 伊藤忠記念財団
理事長 鈴木 善久

伊藤忠記念財団と当館は1974年設立以来、「文庫」という共通テーマで深い関わりをもってきました。共に50周年を迎える節目に、何か一緒にできないかと願っていたところ、双方の想いが一致し、願いが叶ったことを大変嬉しく思っております。

文庫を始めたい方へのガイド製作にあたっては、まず現況を調査するため、執筆担当者が、9つの文庫と幼稚園・保育園6園を訪問しました。お会いした皆さんが文庫を始められたきっかけは様々ですが、どなたからでも、子どもと本への信頼が伝わってきましたし、保育園や幼稚園内の園文庫では家庭での読書につなげる工夫もされていて、今後の可能性が感じられたとのこと。文庫は、公共図書館・学校図書館が整備されてきた今でも、子どもたちひとりひとりにとって温かな居場所となっています。

本ガイドが、文庫をこれから始めてみたい、と思う方の“最初の一歩”に役立つことを願っております。

公益財団法人 東京子ども図書館
理事長 張替 恵子

子どもの身近に、小さな図書室を

私たちは、子どもが本と出会って、楽しく豊かな子ども時代を過ごしてほしいと願っています。

現在、日本全国には公立図書館が 3300 館余りあり、本をそろえて子どもたちを待っています。それでも、ひとりで行くには図書館が遠すぎたり、家の人に連れていってもらう機会がなかったりする子どもはまだまだたくさんいます。そんな子どもも身近に感じられるような、買い物のついでや遊びの帰りに気軽に立ち寄ることのできる小さな図書室があったら、どんなにいいでしょう。そのような図書室は「文庫」と呼ばれ、子どもに本を手渡したいと願う人たちによって、長いあいだ各地で運営されてきました。

(詳しくは p.30 「子ども文庫の歴史」)

また、子どもが通っている保育園、幼稚園、こども園などに充実した本棚——園文庫があって、保育者に本を読んでもらったり、借りて帰って、家で楽しんだりできたら、もっと多くの子どもが本に親しむことができるでしょう。

この冊子では、とくに幼児から小学校低学年くらいまでの子どもたちのための、小さな図書室をとりあげて、その運営についてお伝えします。自分でもそのような図書室をひらいてみたい、あるいは、勤めている園の本棚を充実させたい、などとお考えの方に、参考にしていただけるよう願っています。



子ども文庫 Pippi&Lotta
(鳥取・家庭文庫)



そのおき子ども文庫
(長野・地域文庫)



しらさぎ幼稚園
(埼玉・園文庫)



家庭文庫と地域文庫

家庭文庫は、多くの場合、ふつうの家の部屋や廊下など、生活の場でひらかれます。独立した家屋に設けられることもあります。どちらにしても、家族の了解と協力が必要です。狭くても、その広さに見合った本をそろえれば活動できます。ひらいているときは、外からよく見える場所——玄関や庭先に、「おはいいろください」と呼びかけるような看板を置きます。外からガラス越しに中が見えるとか、玄関からすぐに部屋にはいることができるなど、子どもたちも迎える側も負担が少ないようにします。靴を脱いであがることが多いので、靴を置く場所も必要です。トイレ、洗面所も、可能なら手近なところにあるとよく、安全面にも配慮してください。

しかし、文庫は決まった子どもたちが利用するので、少々使い勝手が悪かったり、その家の生活が見えたりしても、通っているうちに体になじみ、それを含めて、文庫でのあたたかい読書体験となります。立派である必要はなく、できる範囲で場所を確保すればよいのです。



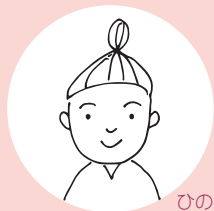
きりん文庫 (千葉) 看板

地域文庫は、地域のさまざまなスペース——公民館、スーパーマーケット、生協、お寺などの一角を借りてひらかれます。読み聞かせなど子どもと本にかかわる活動をしている仲間が協力して運営することが多く、ひとりひとりの負担も少なく、安定した運営ができます。無料または低額で、長く利用できる地域の施設を確保することが課題になります。

家庭文庫よりも、子どもがはいりやすい雰囲気のところも多く、小学生が連れ立ってきたり、読み聞かせのグループが利用したりと、活発な交流の場になりえます。地域の読書活動の拠点となることもあります。

ある文庫の一日

●家庭文庫編



ひのさん

おひさま文庫

開庫日：毎週水曜日 10：00～12：00、
15：00～17：00 おはなし会 11：00～
保育園を退職後、自宅で文庫を始めました。



9：40 準備



10：00 文庫が始まります



子育て仲間のいいさんとむらかみさんが、連れ立ってきました。



10：30 貸出と返却



11：00 おはなし会



11：30 おもしろいおもいで



12：00 午前はおしまい



12：10 かたづけ

●地域文庫編

あおぞら文庫

開庫日：毎週土曜日
14：00～17：00
おはなし会 15：30～

ほんださん
小学校司書



ふじたさん
編集者



やまださん
公民館勤務



13：00 カギあけ



13：30 準備



14：00 文庫が始まります



うちださん一家がやってきました



1. 蔵書をそろえる

すでに持っている本のほか、新たに購入したり、友人や知人から譲り受けたりして蔵書をそろえます。文庫への本の貸出や支援をしている自治体や図書館もあるので、問い合わせてみるとよいでしょう。

本をそろえる方法はさまざまですが、大切なのは、本選びです。

◆ どんな本をそろえるか

子どもの本には、何世代にもわたり、子どもたちを喜ばせてきた作品がたくさんあります。たとえば、『ぐりとぐら』『ちいさなうさこちゃん』『ひとまねこざる』『ピーターラビットのおはなし』『エルマーのぼうけん』など。世代を超えて読みつがれてきた本を、まず蔵書の中心に据えましょう。

(おすすめの本は p.36 参照)

自分が子どものころに楽しんだ本を、大人になって我が子に読み聞かせたり、身近な子どもに手渡ししたりしたら夢中になってくれた、という話はたくさん聞きます。中には、100年以上前に書かれた本もありますが、今も魅力が失っていません。子どもをひきつけるのは、生き生きした絵と、具体的なことばで語られる心躍るおはなしです。子どもは主人公と一体となって、冒険にはらはらし、自然の中での素朴な遊びを楽しみ、個性豊かな登場人物や心地よいことばの響きに夢中になります。不思議なことに、いつの時代も、また、どこの地域でも、子どもが喜ぶ本には、普遍的な力があります。

◆ 本のリスト

信頼できるリストを頼りに本を選びましょう。たとえば東京子ども図書館が編纂した『児童図書館基本蔵書目録』全3巻(『絵本の庭へ』『物語の森へ』『知識の海へ』)があります。これからも子どもに手渡したい作品を厳選し



14:45 貸出と返却



15:30 おはなし会



ふじたさんがきました



16:00 おもしろい



16:20 ひさしぶりの利用も



17:00 かたづけ

たブックリストの決定版です。

また、集団の子どもたちへの読み聞かせに向く絵本をそろえた同館のリスト『よみきかせのきほん——保育園・幼稚園・学校での実践ガイド』は、対象年齢や読み聞かせにかかる時間のめやすも書いてあるので便利です。

さらに、ベテランの児童図書館員4人が編集したリスト『キラキラ読書クラブ——子どもの本702冊ガイド 改訂新版』（玉川大学出版部刊）もあります。

地域の図書館や文庫でブックリストがつくられていることもあります。

伊藤忠記念財団の「子どもの本100冊助成」のリストも、現在手にはいる本の中から選んでいますので、参考になさってください。

<https://www.itc-zaidan.or.jp/summary/#100>



『絵本の庭へ』



『物語の森へ』



『知識の海へ』



『よみきかせのきほん』



『キラキラ読書クラブ』

◆ 子どもから教わる

一緒に読んでみると、子どもがどこをおもしろがっているか、どこに心ひかれているかが伝わってきます。絵の中に、大人が見過ぎてしまうようなものを素早く見つけ、おもしろい言い回しに大笑いし、好きな本を何度もくり返し読みたがります。私たちは子どもの本の受けとめ方から学び、その体験を積み重ねるうちに、子どものために本を選ぶことができるようになります。

2. 運営

◆ 本の分け方と並べ方

本の整理は、文庫の規模や主宰者の考えによって、手をかけても、ごく簡単にしてもよいでしょう。どの本がどこにあるかすべて頭にはいつている場合や、手間はかけたくない場合は、蔵書印を押すだけでも十分です。冊数が多く、きちんと管理したいとお考えなら、以下を参考にしてください。

蔵書一覧

どんな本があるかを記録した蔵書一覧をつくります。Excelなどの表計算ソフトでつくるのが簡単ですが、国立国会図書館のデータをダウンロードしたり、市販の蔵書管理ソフトやアプリを使ったりする方法もあります。検索や配列の変更が簡単にできるので、便利です。

一覧には、書名、著者名、出版社、出版年などの事項を書きこみます。本にラベルをつける場合には、必ずそれも書きこみ、検索したときに、その本がどこに並んでいるかがわかるようにします。資料番号（本を個別化するために1資料に1番号を順番に振る）をつけた場合には、それも書きこみます。資料番号は、冊数を把握するのに便利ですが、なくてもかまいません。

分類とラベル

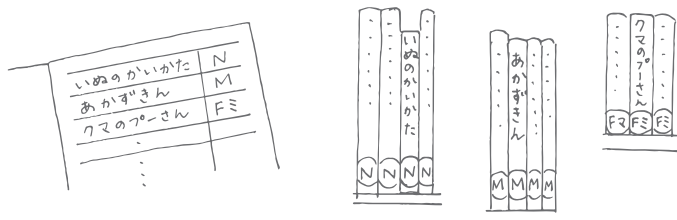
蔵書が多く、幅広い分野にわたっている場合には、図書館で使っている日本十進分類法（NDC）で分類記号をつけるのも有効です。ただ、たいいてい場合は、そこまでの必要はないでしょう。

たとえば、「絵本」「昔話」「物語」「知識の本」の4つに分けて、本には色別のシールやアルファベットや数字などをつけて、分類を示すというやり方もあります。絵本はE、昔話はM、物語はF、知識の本はNなどです。



絵本が中心の文庫では、大きさによって棚の中の位置を変えたほうが見栄えがよく、分類にしたがって本を並べるのは難しくなります。「赤ちゃん絵本」「昔話絵本」「物語絵本」「知識絵本」程度に分けて、背にラベルを貼る方法もあります。または、絵本の場合は画家、物語の場合は著者の頭文字を背につけておくと、同一画家・著者の本が並び、本を探すのに役立ちます。絵本を書名の五十音順に並べている文庫もあります。

棚をあらわす色や番号で分類するやり方もあります。本を効率よく棚に戻したり、探したりできるように、それぞれの文庫で使いやすい方法を工夫してください。



本の装備

本が文庫の蔵書であることを示すために、蔵書印または蔵書シールを用意して、本の所定の場所に押すか、貼ります。前項のように分類する場合は、背にラベルを貼ります。

本のカバーは、外してもそのままでもどちらでもかまいませんが、『ちいさいうち』（バージニア・リー・パートン文・絵 岩波書店）のように本体が一色のクロース装の本や、カバーに魅力がある本は、カバーを残します。本の補強のために、ブックカバーフィルムを貼ることもありますが、利用がそれほど多くなければ、そのお金を本の購入に回したほうがよいでしょう。貼るとしたら、利用頻度が高く表紙の弱い本、カバーをつけたままの状態にした本などです。



けぐり文庫（千葉）蔵書印

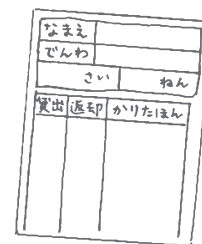


◆ 開庫日と時間

文庫の状況や方針によって、無理のないよう、毎週水曜日とか、毎月第2土曜日とか、決まった日にして、定期的にひらきましょう。小学校低学年でも下校が遅いので、ゆとりをもって来られる時間を確保したいものです。

◆ 貸出と返却

かつて文庫の利用者が多かった時代には、本に貸出カードをつけ、利用者名と貸出期限を書きこんで、貸出返却を行っていました。当時の図書館の貸出方式と同様のやり方です。現在もそれを続けている文庫もあります。



しかし、現在の文庫では、1日の利用者は多くても30人程度でしょう。新しく始めるなら、より簡単な方法で十分対応できます。ノートに貸出記録を書いている文庫もありますが、返却のときに該当の記録を探すのに手間がかかります。利用者ごとの個人カードのほうが便利です。ひとりひとりにカードを用意し、借りた本の書名と貸出日・返却日を記入していきます。カードは名前の50音順に配列しておくことにします。

貸出の冊数や期限は、文庫の状況や方針によって決めます。子どもの手元にいつも楽しめる本があるよう、ゆとりのある冊数と期間を設けましょう。

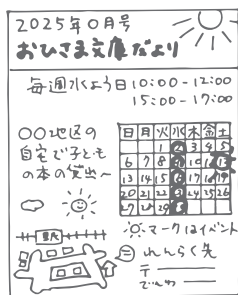
◆ 広報

始めるにあたっては、チラシを近所に配ったり、図書館や公民館、スーパーマーケット、郵便局などに置いたり、自治会のお知らせに情報掲載をお願いしたりと、いろいろな周知方法があります。最も有効なのは、口コミです。利用した親子が友だちに話してくれたり、学校司書や保育士、子育て支援センターの職員などから宣伝してもらったりすると、大きな効果があります。大がかりな広報で一気に利用が増えるより、活動を通して信頼してくれる



人をひとりひとり増やすことが、継続した利用につながります。SNS も有効で、主宰者の考えや素敵な写真にひかれて遠くから来る親子もいます。予約制の文庫もあります。

定期的におたよりをつくり、利用者や地域に配っている文庫もあります。おすすめの本やおはなし会のプログラム、イベントなどを載せて、文庫の楽しさを知らせることができます。おたよりを長く続けると、それ自体が文庫の歴史としてのこります。



3. 活動の実際

◆「みんなが来てくれると、うれしいですよ」

「『ここに本があるから、いらっしやい。みんなが来てくれると、うれしいですよ』という態度で、待つ^{*}ことが、すべての基本です。まずは、子どもの名前を覚えましょう。名前を呼んでもらうのは、子どもにも保護者にもうれしいことです。主宰者にとっては、「〇歳の男の子」といった印象から脱して、ひとりの子どもの性格や好み、成長ぶりが見えてきます。

*うたば、ひびく 石井桃子 「家庭文庫研究会会報」第6号／『新しいおとな』（河出書房新社）収録

◆本をすすめてみる

ひとりひとりの子どもを知ると、本をすすめることができます。積極的に次々と本を手にとる子もいれば、「電車の本」「うさぎの本」など読みたい本をはっきりいえる子もいます。一方、どうしてよいかわからず、本に手が出



ない子もいます。長いあいだ成長を見ていると、その子の読みたい本、その子の喜びそうな本がわかってきます。やりとりを重ねているうちに、子どもも信頼してくれます。拒否されても、気にしてはいけません。拒否されたのは本であって、すすめたあなたではないのですから。

どれを借りたらよいか困っている子には、よく『ねずみのいえさがし』（→p.38）のシリーズを紹介します。2歳前後の子どもはたいてい喜んでくれます。3巻まであるので、気に入ると、次は2巻目の赤い本、次は3巻目の緑の本と順番に借りていきます。そのころには、文庫にも慣れて、ほかの絵本にも手がのびるようになります。

◆好きな本をくり返し読む

幼い子どもほど、1冊の本をくり返し読みたがります。「また同じ本を借りるの？」という保護者もありますが、こだわる本ができることは、素晴らしいことです。大人が好きな音楽を何度も聞くように、子どももくり返し読むたびに楽しいのです。

電車の本、おばけの本など特定のテーマにこだわる子どももいます。子どもの好みを大切にしてください。文庫中の本を探して、提供し、見つからなくなったら、子どもと一緒に「ないね」と困ってください。そうやっているうちにいつのまにか、それ以外の本を楽しむようになります。

年中のMくんは魚が大好きです。魚の本を目ざとく見つけます。知識絵本だけでなく、魚がちょっとだけ登場するおはなしの本も借りていきます。とうとう文庫には、借りたことのない魚の本はなくなり、同じ本をくり返し借りていました。ところが、年長になったころ、気づくとそのほかの本にもどんどん手を出すようになっていました。



◆ 人見知りの子、本に興味のない子には

知らない人の前や慣れない場所で泣き出してしまふ子や、本に興味のない子も保護者に連れられてやってきます。そんな子どもには、本に親しんでもらう前に、文庫が楽しい場所だと感じてもらうことが大切です。楽しい場所だと思ってもらえれば、次の利用につながります。

指人形やパズルなどのおもちゃを置くことも、文庫を親しみやすくします。小さい子は指人形とのやりとりで文庫の人と仲よくなれます。次に来たときに覚えていて、同じように遊んでから、絵本を楽しむようになります。小学生の場合は、『ウォーリーをさがせ!』（マーティン・ハンドフォード作・絵 フレーベル館）や『ミッケ!』（ウォルター・ウィック写真 ジーン・マルソー口文 小学館）などの探しものの本と一緒にやってみたり、パズルに挑戦したりしているうちに、まわりにある本に目がいくこともあります。

初めて文庫に来た日、2歳のHくんは、おかあさんが中にはいっても、自分は入口に立ってのぞいているだけです。「あつ、車」「くまだ」など、そこから見えるおもちゃの名前をさげんでいます。くまの指人形で「こんにちは」と呼びかけると「こんにちは」と返事をしてくれます。「はいる?」と聞くと「はいらない」とこたえます。絵本の読み聞かせを、立ったままおもしろそうに聞いているのに、やっぱり「はいらない」と、いいはります。そうやって小一時間やりとりして帰っていきました。ところが次に来たときには、気づいたらもう文庫にはいって本を手にとっていました。



◆ 本を選ぶ力のある子には

中にはとても上手に本を選ぶ子があります。そんな子には口出しは控えて、そっと見守りましょう。

小学3年生のNちゃんの本の選び方はユニークです。本棚から気になる本を2冊選んで、床に置いてじっくり比べ、1冊だけ残します。また本棚から2冊を出してきて、最初の1冊と比べるというようにして、借りる本を選んでいきます。その的確なことには、おどろいてしまいます。今迷っている本がNちゃんにぴったりだと思ったときだけ、「それ、おもしろいよ」とひと押ししています。

◆ 図書館につなぐ

文庫にない本を求められたり、調べものなどこたえられない質問をされたときには、図書館の利用をすすめます。必要に応じて、図書館の蔵書目録を検索するなどして、所蔵の有無を確認します。

◆ ひとりひとりに読み聞かせる

余裕があれば、子どもひとりひとりに本を読んであげましょう。文字が読める子でも読み聞かせてもらうことで、楽しめる本がぐんと広がります。子どもは読むことより、聞くことのほうがずっと得意だからです。ひとりの子に読み聞かせていると、いつのまにか何人もの子が寄って来て、一緒に楽しむこともあります。ただ、混んでいるときには、全体に目を配ることも大切です。

◆ おはなし会をひらく

おはなし会をひらくと、子どもたちの楽しみになり、本との出会いにもつながります。絵本の読み聞かせやおはなし（ストーリーテリング）、わらべ



うたなど聞き手に合わせて、プログラムを組みます。おはなし会の参加カードをつくっている文庫もあります。おはなし会に参加するたびに、ひとりひとりのカードにシールを貼るか、スタンプを押していき、たまるとささやかな賞品がもらえます。

◆ イベントをひらく

文庫の人が好きなことや特技をいかしたイベントをひらくと、楽しいだけでなく、新たな利用者を増やすことにもつながります。とくに複数の人が運営する地域文庫では、それぞれの情報や技術、知識をいかして、科学遊び、古本市、読書会、集団遊び、キャンプ、バザーなどさまざまな取組みができます。

◆ 自立した読書人として

小さくても子どもは、自分の意志で本を選びます。大人はできるだけ口出しを避けて、子どもの気持ちを大切にしたいものです。

小学生になると、友だちを連れてきたり、仲間と来たり、ひとりでやってきて、さっと本を選んで帰っていったりと、それぞれ、自立した読書人になります。文庫の人が、近隣の小学校を読み聞かせなどで訪問し、文庫のことを紹介すると、それをきっかけに来る子もいます。

小学4年生のSくんは、夕方遅くやってくると、数冊の本を手にとって読みふけります。「帰る時間だよ。借りる本を決めて」と、うながされてもなかなか動きません。さんざんせかされて、ようやく立ちあがり、物語の棚の前で、時間をかけて選びます。シリーズものが好きで、いつもいくつかのシリーズを並行して読みながら、新しい本を探しています。



◆ 保護者とのつながり

保護者がくつろいだ気持ちになると、子どももリラックスします。子どもが楽しむと、保護者も気持ちが楽になります。読書に過大な期待を寄せたり、読ませなくてはと思いこんでいるようなら、気持ちを楽にさせてあげてください。文庫でゆっくりとおしゃべりしたり、遊んだりするだけでも子どもにとってはよい体験です。折にふれて、子どもに読み聞かせをすることが、読書の第一歩になることを伝えてください。

保護者の中には、子どもの本に興味をもって、自分の楽しみのために読み始める人も出てきます。そういった人たちに本を紹介するのも文庫の役割です。その人たちの中から、学校での読み聞かせ活動に参加するなど、私たちの仲間になってくれる方が出てくることもあります。

保護者自身が懐かしい本との再会を果たすこともあります。

おばあちゃんとおかあさんと子どもの3世代で来たご家族がありました。おばあちゃんは、本棚から『みどりのゆび』（モーリス・ドリュオン作 岩波書店）をとり出して、熱心に読み始めました。読み終わると思い出を話してくださいました。小学校高学年のころに読んで、主人公のチトの名前を覚えていること、チトの家の階段が2つあるのがうらやましかったこと、お兄さんが買ってくれたことなど、当時の子どもの、本を読む喜びが伝わるおはなしでした。





園文庫

幼稚園、保育園、こども園などで、子どもたちや保育者、保護者が自由に利用できる**園文庫**をつくりませんか？

子どもたちはそこで自由に本を見たり、保育者に読んでもらったり、楽しいときを過ごすことでしょう。保育者が、クラスで読み聞かせる絵本を選ぶこともできます。また、子どもが家に借りて帰って、家族で読むこともできます。おはなしや本を楽しむ、そんな小部屋やコーナーが子どもたちの通う園にあったらどんなによいでしょう。

子どもと毎日接している保育者は、ひとりひとりの性格や好み、成長の過程、家族のことを知っています。そこから、ひとりひとりに、あるいはクラス全体にふさわしい本を選べるでしょう。読んだ本を遊びに発展させたり、遊びや生活から生まれた好奇心を本につなぐこともできます。

出入口や廊下など目につくところに、読み聞かせをした絵本を展示したり、季節の本を小物と並べたりすれば、親子の話題にもなり、保護者に子どもの本への興味をいだけせることにもなります。

たくさんの子どもの長時間過ごす場で、本との楽しい出会いが生まれるような環境をつくってみてください。

私達は幼稚園で、毎日のように子ども達に絵本を読んでいます。お話が始まる前の嬉しそうな顔、途中で見せる緊張の面持ち、終わった後の安堵の表情、そしてその後の、読み手の私達に向けられる親愛の眼差し——そのどれもが、絵本を読むことで生まれるのです。絵本は、子どもの想像する力を引き出し、“お話の世界に身を置く”ことを教えてくれます。そして同時に、子どもは“読んでもらう幸せ”（それは自分に注がれた愛情）を感じ、お話が楽しいほど、読み手への親愛の気持ちを深めます。絵本を読むことは、子どもとおとなの、子と親の、心の交流でもあると思います。

『幼稚園で選んだ親子で楽しむ新 100 冊の絵本』みなと幼稚園（東京）

●ある保育園の読み聞かせ



各クラスに本棚、玄関の近くに園文庫があります

4 歳児クラス



●ある幼稚園の本の貸出

1

木曜日、子どもが本を選びます。



2

先生が記録して、子どもは図書バッグに入れて、持ち帰り。



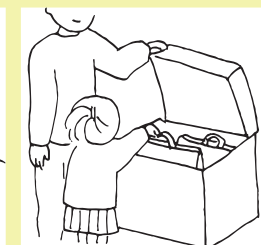
3

週末、おうちで楽しめます。



4

火曜日の登園時に、親子で箱に入れて返却。（バッグは園で保管）





1. 蔵書をそろえる

どのような本を置くかは、7ページを参考にしてください。まずは、長く読みつがれている本を中心にそろえます。子どもたちと読んでいるうちに、どんな本を加えたらよいかがわかってきます。

充実した読書活動をするには、毎年、園の予算に図書購入費を計上し、よく読まれて傷んだ本を買い替え、新しい本を入れていってください。子どもたちはきれいな本にひかれます。汚れたり、破れたりした本をそのままにすると、どうしても本を大切に扱わないことにつながってしまいます。

2. 運営

本の整理については、9ページを参考にしてください。

貸出をすれば、家でも気軽に本を楽しむことができます。忙しい保護者が、寝る前のほんの5分でも本を読んでくれたら、子どもにとってはどんなにうれしいことでしょう。保護者にとっても幸せな時間になるでしょう。子どもは、園で友だちと楽しんだ本だけでなく、自分自身が読みたい本を選んで、本の世界を広げることができます。

貸出方式は、特定の子どもたちが対象なので、できるだけ簡便で手のかからないものがよいでしょう。帰りがけに自由に借りていくという園では、保護者が、ノートに日付、書名、名前を書いて、返却したら返却日を書いて、線で消すという方式をとっています。

本の貸出の日を設け、クラス単位で名前の一覧をつくって、保育者が、ひとりひとりの借りた本を記入していくやり方をとっている園もあります。

貸出作業は保育者、返却作業は保護者という園もあります。



3. 活動の実際

子どもたちが、大好きな担任の先生から、毎日、本の読み聞かせをしてもらっていると、最初は騒がしくても、いったんおもしろいと知ると、身をのり出して聞くようになります。そういう体験をくり返すうちに、静かに耳を傾けて、おはなしに身を任せる心地よさを知っていきます。時には、クラス全体が、本の世界に深くはいりこみ、終わってからもしばし帰ってこられない魔法のような時間を共有することもあります。

ある保育園では、年少から年長までの子どもたちが『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』（→p.39）の読み聞かせをひとりのこらず、夢中になって聞いたそうです。

同じおはなしを聞いた子どもたち同士で、遊びに発展することもあります。先生がトロールになって、『三びきのやぎのがらがらどん』（→p.44）ごっこをしたり、『エルマーのぼうけん』（→p.46）の劇遊びをすることもあります。本がクラスの共通した文化となるのです。

今の子どもたちの生活体験の乏しさや、ことばを知らないことを心配する声もあります。とくに長く読みつがれている絵本には、「石炭」「マッチ箱」「牛乳配達」「レコード」など知らないものも登場します。また、日常で聞かないことば、「火を見るより明らか」「おあつらえむき」「おだぶつ」などもあります。でも子どもは、そもそも知らないものに囲まれて、ひとつひとつ学んでいくのです。知らないことがあったとしても、その本のおもしろさが今も生きているなら、ためらわないでください。知らないことばは、子どもにとって力試しとなり、時間をかけて自分のものにしていくのです。

子ども文庫についてのQ&A

● 文庫を始める前

▶ 開催場所が見つかりません。どうしたらよいですか？

あまり立派な場所で始めようと気負いすぎず、家庭文庫なら家族に相談した上で、まずは玄関先に本をならべるところから始めてみる、地域文庫なら自治体に相談して近隣の公民館を紹介してもらうなど、できる範囲で進めましょう。スーパーマーケットの一角で文庫を開催している方もいます。ふだん利用するスペースから候補をあげていくと、よい場所が見つかるかもしれません。

▶ 文庫の運営のための資金はどこから捻出すればよいでしょうか。自己資金だけでは限界があります。

お住まいの自治体にボランティア窓口があるかもしれないので、相談してみましょう。地元の生協や、社会福祉協議会に問い合わせしてみるのも、ひとつの手です。伊藤忠記念財団のように子ども文庫の活動を支援する団体の助成を申請することも考えてみてください。また、資金とは少し異なりますが、市町村立や県立の図書館の団体貸出制度を利用するのもよいでしょう。

◆伊藤忠記念財団の子ども文庫助成について

1975年度以来、読書ボランティアに活動費（30万円）や図書現物を助成する「子ども文庫助成」を毎年行っています。例年4月から夏頃にかけて募集を行っておりますので、ご興味のある方は、ぜひ財団までお問い合わせください。

＊読書ボランティア対象の助成です。幼稚園・保育園や学校からのご応募は原則受け付けておりません。

▶ 文庫を設置する際、届け出などは必要ですか。

届け出はとくに必要ありません。園文庫についても同様です。冊数やスタッフ数などの決まりもないので、主宰者や園の方針で設置してください。

● 蔵書について

▶ 用意できる本が数十冊程度です。何冊集まれば文庫を開始できますか。

「何冊集まれば文庫を始めてもよい」という決まりはありません。たとえ10冊に満たなくても、あなたが子どもたちに読んでほしいと思える本がそろっていれば文庫は始められます。まずは子どもたちひとりひとりへの対応を大切に、少しずつ本を増やしていきましょう。

▶ どんな本を用意すればよいのでしょうか。こういった本はよくて、これはよくない、といった例はありますか。

あなたが「自分の文庫に置いて子どもたちに読んでほしい」と心から思える本を選ぶことが大切です。その中に子どもたちが夢中になる本があれば、その理由を探ってみてください。子どもたちの希望を聞くことも、時には必要ですが、一過性の流行には流されず、長く子どもたちの手にとられる本を、自分の力で見出してみてください。

もし、あなたと一緒に本について勉強してくれる人がいるのであれば、そこから学ぶことも多いでしょう。東京子ども図書館でもいろいろな講座を開催しておりますので、よろしければご参加ください。

▶ 文庫にマンガを置きたいのですが、よいでしょうか？

子どもに読んでもらいたいと思うマンガであれば、文庫に置いてください。絵から知識や情報を得やすい、あるいは、くつろげる居場所でありたいからマンガを置くという考えもあります。

文庫への呼び水とするなら、マンガを読み終わった後、どうやって次の本につなげていくかを考えておく必要があります。

▶ 有志の方から図書を寄贈していただくことがあります。寄贈自体はありがたい、すべて蔵書にできたらよいのですがそうもいきません。みなさん、どのようにされているのでしょうか。

義理や人情で文庫に本を置く必要はありません。あなたが子どもたちに読んでほしいと感じられない本なのであれば、場所が限られているなどとお伝えした上で、お断りしてはどうでしょうか。寄贈であっても、本当に自分の文庫に置きたい本かどうかを検討しましょう。

● 運営について

▶ 文庫で工作をしています、それだけを楽しんで読書につながりません。

子どもたちにとって楽しい場になっているのです。文庫と知らず、遊び場と思っているのかもしれませんが。やって来たら、まず1冊は文庫の人に本を読んでもらうとか、工作を始める前におはなし会をするなど、本と結びつく活動と組み合わせてはどうでしょうか。

▶ 文庫でお菓子やお茶を出したほうがよいでしょうか。

原則として必要ありません。ただ、子どもや保護者がひと息つける時間を設けたいならそれもよいでしょう。その際は、「お茶の時間は本をしまう」、「食べたり飲んだりしながら読まない」など、主宰者の考えでルールを決めてください。また、アレルギーの有無についても必ず保護者に確認しましょう。

▶ 文庫でスマホを見ている子がいて、気になります。

主宰者の考えで、家族との連絡以外はスマホ禁止にするなど、ルールを決めるとよいでしょう。

▶ 紙の文庫通信やSNSでの情報発信を定期的に行う予定です。本の紹介もしたいのですが、表紙を載せる場合、出版社に問い合わせなければなりません。また、ほかに気をつけるべきことはありますか。

出版社によって対応が異なるので、まずは載せたい本の出版社のホームページの著作権に関する注意を見てください。表紙の画像（書影）のみであれば、一定の基準を満たせば許可なく掲載できる場合が多いですが、必ず確認してから掲載してください。本の中身を撮影してSNSに投稿したり、読み聞かせの様子を動画サイトにあげたりすることは、著作権者（作者）の許諾なしでは行えませんので、ご注意ください。なお、読み聞かせや部屋の様子など、本が写りこむ程度で、本文が読みとれない場合は、許可をとらなくても問題ありません。

また、子どもや保護者の写真を掲載したい場合は、事前に必ず本人と保護者の許可をとるようにしましょう。

- ▶ 文庫を運営する際にボランティア保険に加入したほうがよいでしょうか。

ボランティア保険とひと口に言っても、「活動中の本人を補償するもの」、「活動に参加している参加者を補償するもの」、「イベントのみに適用するもの」、「会場の物品の破損等を補償するもの」など種類が多くあります。また、保険加入にあたり参加資格が明記されているものもあるため、まずは、お近くの社会福祉協議会に相談をしてみてください。

● 利用者・協力者について

- ▶ 地域の方や子どもの保護者に「知らない人」ではなく「文庫をしている安全な人」と認識してもらうにはどうしたらよいですか。

文庫を始める際は、まずは知り合いの子どもを招き、その後、少しずつ広がっていくとよいでしょう。通っている家族から紹介があると、新しい利用者也安心です。保育園や幼稚園に通う子どもがひとりでも来てくれれば、保護者間で話題になって、ほかの園児も来てくれるようになるかもしれません。

- ▶ 文庫をひらいてみたものの、利用者がなかなか来ません。

上の質問と同様に、まずはお知り合いに来てもらうのはどうでしょう。そこから口コミが広がっていく可能性があります。また、近くの小学校や保育園、幼稚園、図書館でチラシを配ってもらうのもひとつの手です。ただ、利用者を増やすことばかりを気にせず、ひと家族でも利用してくれているのであれば、その方々を大切にしてください。

- ▶ そもそも地域に子どもがいません。その場合はどうすればよいでしょうか。

宣伝の範囲を地域の外に広げてみてはどうでしょう。SNSで情報を見つけた方が、遠方から訪れることもあるようです。その場合、「1日貸切」のような予約制のサービスがあると、家族で1日じっくり楽しんでもらうこともできます。

- ▶ 文庫によく来てくれる子どもが学校にあまり行っていないようです。こちらに必要な配慮や、何かできることはありますか。

その子にとって、あなたの文庫が居心地のよい場所になっているということなので、まずはそのことに自信をもってください。また、無理に登校をうながしたり悩みを聞き出したりすることはせず、その子が好きな本を紹介するなど、あくまで文庫の主宰者として、「その子」個人と向き合い、自然に接してあげてください。

障害がある子や日本語が母語でない子などが訪れる可能性もありますが、そのときの対応も基本的には同じです。文庫内のバリアフリーを意識したり、多言語絵本を揃えたりなど、「その子」に必要なのは何かを考えることが大切です。

- ▶ 地域で、似たような活動をしているメンバーとつながりたいです。

活動している地域に、文庫連絡会やおはなしボランティアの団体があるようでしたら、そことつながりをもつのがおすすめです。公立図書館が地域の活動を把握している場合が多いので、たずねてみてください。

- ▶ 地域の図書館や学校、幼稚園、保育園と連携したいと考えていますが、きっかけがつかめません。みなさん、どうされているのでしょうか。

あなたやご親戚、ご友人のお子さんが通う施設を対象に、司書や先生たちと顔なじみになるところから始めましょう。連携ありきで会うのではなく、まずは、その施設の利用のために訪れてください。そのうち顔なじみになると、おはなしボランティアの提案や文庫へのお誘いも自然とできます。近隣の保育園のお散歩コースや小学校の課外学習の訪問先に選ばれている文庫もあります。小さな積み重ねが地域に根ざした活動につながります。

- ▶ スタッフに若い世代を呼びこむコツはありますか。子育て世代や学生もスタッフにいてくれると後進の育成につながると思うのですが、みな忙しく、思うようにはいきません。ほかの文庫の成功事例があれば知りたいです。

共働き世代も増えて、20～30代を運営側に引き込むのは至難の業です。それでも保護者の中には、この活動に興味のある方がきつといます。はじめからスタッフとして声をかけると負担になるので、利用してくれるときだけでも貸出業務を手伝ってもらい、読み聞かせをしてもらうなど、義務と感じさせない範囲で活動の楽しさを感じてもらいたいでしょう。絵本や子どもの本が好きな方には、本について話したり、すすめたりして、本を通して親しくなると、次のチャンスが生まれるかもしれません。文庫を利用していた子どもが中高生になって、スタッフに加わってくれたという事例もあります。

大学に、図書館や児童教育の専門学科や児童文化サークルなどがある場合もあるので、そこにボランティア募集のチラシを出してみると、希望する学生が集まるかもしれません。

● 園文庫について

- ▶ 園文庫のための部屋を用意する必要はありますか。

専用の部屋があるといいですが、必須ではありません。一室用意できない場合は、安全を確保した上で、玄関や廊下など、子どもや保護者が利用しやすい場所に図書コーナーをつくることから始めるとよいでしょう。

- ▶ 園文庫専任の先生の配置は必要ですか。

園文庫内に常駐する必要はありませんが、本の整理や貸出の確認などをするための担当者はいたほうがよいでしょう。たとえば、週や月ごとに担当者を変えると、ひとりの先生に負担が集中せず、園文庫の方針を全体で共有できるので、よいかもしれません。

- ▶ 園文庫と保護者を結びつける、おすすめの方法はありますか。

送り迎えに来た保護者がはいりやすい場所に、園文庫をつくるのがおすすめです。園文庫は常時開放して、保護者が子どもの準備を待つあいだ、自由に本を手にとれるようにしておきましょう。園文庫によっては、保護者の読書ボランティアグループが発足して園内のおはなし会や図書整理に協力している例もあります。子どもの本に興味のありそうな保護者に日頃から声をかけるようにすると、新たな読書活動が生まれるかもしれません。

子ども文庫の歴史

はじめに ～ 戦前の子ども文庫

家庭文庫や地域文庫等の子ども文庫は、その多くが有志による草の根の活動です。その活動は国内の公立図書館や児童書出版の発展にも大いに貢献してきました。子どもたちの読書環境を支えてきた、日本特有の存在といえます。

子ども文庫の歴史を紐解くと、記録は限られているものの、明治期にはすでに民間人が運営する子どものための図書館が数多くあったことがわかります。1906（明治39）年に竹貫佳水が東京青山に設立した「竹貫少年図書館」がそのひとつです。竹貫は当時子どもたちに読まれていた人気雑誌「少年世界」に作品を掲載していた作家であり編集者です。少年図書館の開館日には『こがね丸』で知られる巖谷小波にお伽噺を語ってもらったり、蓄音機を回して子どもたちと音楽を聴く会を催したりすることもありました。その後、1908（明治41）年に竹貫は東京市立日比谷図書館児童室の嘱託職員に就任し、その流れで竹貫少年図書館は閉館。蔵書は最終的に日比谷図書館に寄贈されたようです。この他にも、竹貫の活動に影響を受けたとされる青森の「弘前少年図書館」や、北海道函館の「千代見園」など、私設の子ども図書館は少しずつ全国に広がっていきました。大正期から昭和期にかけても、青森の「正進会文庫」や、関東大震災をきっかけに設立された複数のセツルメント^{*}による児童図書館などの活動記録が確認できます。新潮社で「日本少国民文庫」の責任編集者を務めていた山本有三も、アジア太平洋戦争中の1942（昭和17）年7月から2年ほど、「ミタカ少国民文庫」を三鷹市の自宅でひらいていました。記録に残っていないだけで、自宅を小さな図書室として開放していた民間人はきっと他にもいたことでしょう。

しかし、現在に続く子ども文庫が日本中に燎原の火のように広がるのは1960年代以降のことです。この時代の流れについて、以降にくわしく記します。

戦後の子ども文庫と家庭文庫研究会

1945（昭和20）年8月の敗戦以降、日本ではしばらく混乱の時代が続きます。度重なる空襲で公立図書館の蔵書も多く焼失し、町には戦争孤児が溢れ、多くの人が食事や住居を工面するのに精一杯な毎日でした。しかし、そのような中でも子どものためによい本を、と考える大人は存在しました。1950（昭和25）年には図書館法が施行、1953（昭和28）年には学校図書館法が公布され、その同年に児童図書館研究会が発足します。焼け跡がまだ残る東京で図書館勤めをしていた石島きよは、「家庭環境にめぐまれぬこの子どもたちと、ただ時間を費すだけでなく、何かを育てていきたい」という思いから家庭文庫を始めました。この文庫は2年ほどで閉じられたようですが、この短期間の間にも「この場所であれば本が読める」と聞きつけた子どもたちが大勢押し寄せてきたと記録されています。その他にも東京都豊島区の「雨にも風にもまけぬ教室」や福島県郡山市の「クローバー子供図書館」など、各地で子どものための私設図書館が生まれました。村岡花子による「道雄文庫ライブラリー」や土屋滋子による「土屋児童文庫」が誕生したのもこの時期のことです。

1957（昭和32）年、前述の村岡と土屋、そしてアメリカ留学から戻った石井桃子が中心となって、家庭文庫研究会がつくられました。石井は戦前にも「白林少年館」という子ども文庫を運営しており、留学時にアメリカ・カナダ・イギリスの児童書出版や図書館の児童サービスを目の当たりにしたことで、日本における子どもの本の現状に大きな課題を感じていました。そうした思いが、東京都内で活動していた2文庫の主宰者の思いとも結びつき、研究会の結成に至ったのでしょう。翌年の1958（昭和33）年には石井も荻窪の自宅を開放して「かつら文庫」を始め、家庭文庫研究会の活動は徐々に広がりを見せます。

年6回発行されていた「家庭文庫研究会會報」には、各地の子ども文庫の紹介や文庫運営に関する質問への回答、海外の児童書事情に関するレポートなどが掲載されています。会員は日本全国に広がっていたようで、アジア財団の助成によって各地の文庫に20冊程度の図書セットを貸し出す活動も行っていました。さらには、外国語絵本の翻訳出版も実現させます。石井たちは、かつら文庫で原書を日本語に訳して読み聞かせる中で子どもたちの人気を得た絵本を翻訳・編集し、出版と販売については福

*学生などが、貧困の状況下にある人々と生活をともにし、その地域の生活の向上を図るための施設。

音館書店に委託する形で、原書と同じ版型で刊行したのです。このことは日本におけるその後の絵本出版に大きな影響を与えました。

家庭文庫研究会としての活動は1965（昭和40）年に終了し、児童図書館研究会に合流します。子どもの読書環境を支えるためには家庭文庫だけでは限界があるとして、日本の公立図書館の充実を見据えての合流でした。

『子どもの図書館』と公立図書館

石井のかつら文庫の開設から7年後の1965（昭和40）年、石井の著書『子どもの図書館』が岩波書店から刊行されました。かつら文庫の運営とそこに通った子どもたちの7年の記録、子どもの本の在り方についての意見や海外留学時に目にした欧米の児童図書館の様子などがまとめられた新書です。この本の中で石井は、個人による私設の子ども文庫の力には限界があるので公立図書館の児童部を育てていく必要がある、そのことがよりよい子どもの本の出版にもつながると述べています。

しかし石井の訴えとは裏腹に、日本各地で子ども文庫を始める人が続出しました。子どものために、子どもの読書のために何かをしたいと常々考えていた人々にとって、この本は起爆剤のような存在でした。先に述べた通り、石井は「子ども文庫を増やしましょう」と伝えたかったわけではありません。子どもの本に関する公的サービスの充実を願っていました。それでも、この本をきっかけに全国に生まれた子ども文庫が、まだ少なかった日本の公立図書館が発展するための一翼を担うことになるのです。

1960年代半ばから1980年代にかけて、子ども文庫は各地域の子どもたちの絶大な支持をもって迎えられます。いざ文庫を始めると子どもたちが自宅や集会所に溢れ返り、本も資金も足りずに個人の限界に直面したという例が多々ありました。そして、こうした現実が文庫関係者による公立図書館設立に向けた運動の後押しとなりました。また1965（昭和40）年には、東京都の日野市に日野市立図書館が設置されます。この図書館は2年前に日本図書館協会から出されていた『中小都市における公共図書館の運営』（中小レポート）の内容を実践し、移動図書館車等を用いた貸出中心の図書館サービスがいかに地域住民に受け入れられるかということを示しました。こ



「家庭文庫研究会會報」第1号

のことをきっかけに『市民の図書館』（日本図書館協会、1970（昭和45）年）が刊行され、公立図書館の存在意義について訴える動きが活発になるのです。この本の中では家庭文庫・地域文庫の存在や児童サービスの重要性についてもしっかりと触れられています。子ども文庫の主宰者たちはこの本と石井の『子どもの図書館』を拠り所に公立図書館設置を各地で訴えました。戦後の子ども文庫の担い手であった女性たちを中心に、多くの一般市民がこの運動に関わり、日本各地に新たな公立図書館の誕生を実現させていったのです。



『子どもの図書館』
（岩波新書）

文庫活動の変化と読書ボランティア活動の普及

1974（昭和49）年1月31日、その設立から16年目に石井の発案でかつら文庫は法人化を迎えます。それはかつら文庫単体ではなく、先に名前を挙げた土屋滋子の2つの土屋児童文庫、松岡享子の「松の実文庫」という4つの家庭文庫が合わさる形で、「東京子ども図書館」と名称を改めての法人化でした。これは、より長くかつ広く児童図書館の活動を続けていこうとする石井や文庫仲間の考えによるもので、その後、かつら文庫は単体の文庫ではなく東京子ども図書館の活動拠点の1つとして現在まで運営を続けています。母体となった家庭文庫の主宰者3名が目指すところは、それぞれ少しずつ異なっていました。自身の幼少期の読書の喜びを次の世代にも伝えたかった土屋、よりよい子どもの本を生み出すために子どもから学びたかった石井、子どもの読書のために図書館ができるサービスを実践したかった松岡。そうした3名の意志が、東京子ども図書館の現在の活動にも生かされています。

この時期、各地で子ども文庫の連絡会や勉強会がつくられ、子どもの読書に関わる人々の横のつながりが強化されました。1967（昭和42）年には日本親子読書センターと日本子どもの本研究会、1970（昭和45）年には親子読書地域文庫全国連絡会が発足しています。海外で暮らす子どもの言語継承の面でも文庫活動は注目され、1979（昭和54）年には国際児童文庫協会も発足しました。東京子ども図書館と同じ年に設立された伊藤忠記念財団による「子ども文庫助成」の開始や、自治体による文庫への支援の実施も相まって、子ども文庫の活動は一層盛んになりました。しかし、1980

年代の後半からその勢いは徐々にかげりを見せます。少子化の進行や、子どもが習い事や受験勉強で忙しくなったこと、ゲームやアニメといったメディアの拡大など、子どもの生活環境があらゆる面で変わっていったことが要因と考えられます。子どもの読書離れが問題にされ始めたのもこの頃のことです。自宅や集会所で文庫をひらいて待っているだけでは子どもたちがなかなか来ない時代になってしまいました。そのため、地域の幼稚園・保育園や小学校、児童館などに出かけていっておはなし会や本の貸出を開催する子ども文庫も増えていきます。

そうした中で2000（平成12）年を「子ども読書年」とすることが国会で決議され、翌2001（平成13）年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定されます。それに伴い政府によって策定された「子どもの読書活動に関する基本的な計画」で図書館や学校と民間団体、すなわちボランティアとの連携強化が推奨されたことによって、それまでとは異なる形の読書ボランティア活動が全国的に拡大していきました。小学校で朝の時間の読み聞かせが行われるようになったのもこの頃のことです。公立図書館のおはなし会もボランティアが行うことが増えました。子ども文庫の主宰者もこうした流れの中で、地域の学校や園、図書館との連携をより深めていきました。



伊藤忠記念財団 1975 年度贈呈式
(左から伊藤忠記念財団 戸崎理事長、
東京子ども図書館 松岡理事長)

子ども文庫のこれから

最盛期には4000を超えると言われた子ども文庫も、今は減少の途にあります。個人で運営している例が多く、公的な調査に限界があることもあり正確な数はわからないものの、筆者が子ども文庫を訪問すると、「後継者問題が喫緊の課題だ」という意見をよく聞きます。子ども文庫が次から次に誕生した1970年代は今からおよそ50年前。その頃に文庫を始めた20～30代の女性を中心とする主宰者たちが、自身の高齢化と後継者不足を理由に子ども文庫を閉じることを考え始める時期に来ています。

この冊子で子ども文庫の歴史を語る中で、私的な活動には限界があるから公的なサービスを充実させるべきとする考え方を何度か示しました。50年前と比べ公立図書館の数は増え、現在ではかつての子ども文庫の数に近い3300館に至り、その多くが

児童室を備えています。このように公的サービスが充実しても、なお子ども文庫の役割があります。

子どもと本をつなぐために大切なことは、たくさん集めた児童書をきれいに並べて提供することではなく、本のある場所に訪れる子どもたちひとりひとりの顔と名前を覚えて、その子たちがどんな本に興味があるのかを理解している大人の存在です。こうした子どもたちひとりひとりに対応するサービスは、図書館の児童サービスでも基本ですが、個人による文庫ではさらにきめ細かい対応ができます。また、子どもたちはもちろん、その保護者たちと地域の情報交換ができるというのも子ども文庫という場所ならではの強みです。そうした居場所になる小さな図書室が、子どもたちが家や学校から自分の力で訪ねていける距離にあれば、どんなにいいでしょう。

現在、IT機器の普及やコミュニケーションの在り方の変容など世界は絶え間なく移り変わっていますが、どのような状況であっても、その時を生きるひとりひとりの子どもが幸せであってほしいと思います。子ども文庫はそのための一助となれる貴重な存在です。この冊子を手にとった皆さんがこうした活動への興味を育み、子ども文庫の歴史に新たな章を加えてくださることを、心より願っております。

伊藤忠記念財団 野尻夏帆

参考文献

- 『子ども文庫の100年——子どもと本をつなぐ人びと』高橋樹一郎著 みすず書房 2018年
- 『日本近代公共図書館史 46 児童に対するサービスの開始(13)——私立竹貫少年図書館 石井敦「ひびや：東京都立中央図書館報」28(135) 東京都立中央図書館 1986年3月
- 『“家庭文庫”に思うこと 石島きよ「図書館雑誌」vol.56, no.11 日本図書館協会 1962年11月
- 『新編 子どもの図書館』（石井桃子コレクション3）石井桃子著 岩波書店 2015年
- 『石井桃子さんがはじめた小さな子ども図書室 かつら文庫の50年——記念行事報告』（別冊こどもとしゃかん）東京子ども図書館編・刊 2008年
- 『新しいおとな』石井桃子著 河出書房新社 2014年
- 『ねりまの文庫——40年のあゆみ』ねりま地域文庫読書サークル連絡会編・刊 2009年
- 『50周年記念誌（2010～2020） 地域文庫 その広がりと深まり』ねりま地域文庫読書サークル連絡会編・刊 2020年
- 『子どもの読書を考える事典』汐崎順子編 朝倉書店 2023年
- 『市民の図書館 増補版』日本図書館協会編・刊 1976年
- 『中小都市における公共図書館の運営 復刻版』日本図書館協会編・刊 1973年

本のリスト ▶ 赤ちゃんから小学校低学年くらいにおすすめの、本のリストです。
伊藤忠記念財団「子どもの本 100 冊助成」(→ p.8) より選びました。

赤ちゃん絵本

● おつきさまこんばんは

林 明子 さく
福音館書店
1986 年 18p
18 × 19cm



「おつきさまこんばんは」と呼びかけると、おつきさまがにっこり。そこへ雲が現れ……。短いながら起承転結のある小型絵本。

● くだもの

平山和子 さく
福音館書店
1981 年 24p
22 × 21cm



まるごとの果物。次頁では切って、お皿にのせて差し出される。「さあどうぞ。」瑞々しい果物に思わず手が伸びる。続編に『やさい』も。

● くっついた

三浦太郎 作・絵
こぐま社
2005 年 24p
18 × 19cm



「きんぎょさんときんぎょさんが くっついた」リズムカルな言葉で離れていた金魚やサルがくっつく。最後に親と子もくっついて笑顔に。

● どうぶつのおかあさん

藪内正幸 え
小森 厚 ぶん
福音館書店
1981 年 24p
22 × 21cm



抱いたり、くわえたりして子どもを連れ歩く動物のお母さん。猫やライオン、サル等 11 種。写実的な絵と共に動物の習性を伝える。

● ねこがいっぱい

グレース・スカール さく
やぶき みちこ やく
福音館書店
1986 年 20p
18 × 19cm



「しましまねことぼちぼちねこ せいいたかのっばにおちびちゃん」ねこたちが勢ぞろいして「にゃーお」。『いぬがいっぱい』もあり。

● もこもこもこ

元永定正 絵
谷川俊太郎 作
文研出版
1977 年 31p
29 × 23cm



「しーん もこ もこもこ にょき」とオノマトペだけで、美しい色彩が変化していく不思議な世界。子どもも「もこ」とつぶやいてしまう。

絵本

3 歳 ~

● かいじゅうたちのいるところ

モーリス・センダック さく
じんぐう てるお やく
富山房
1975 年 40p
24 × 26cm



いたずらをして寢室に放りこまれたマックスは、海を航海して、怪獣たちのいる所へ。魔法で怪獣の王さまになり、さあ皆で怪獣踊りだ。

● くまのテディちゃん

ロジャー・デュボアザン 絵
グレッタ・ヤヌス 作
湯沢朱実 訳
こぐま社
1998 年 31p
16 × 13cm



テディちゃんの黄色いズボン、ほらね、はいしています。椅子、座っています。テディちゃんの持ち物を 1 つ 1 つ紹介する小型絵本。

● ぐりとぐら

おおむら ゆりこ え
ながかり えこ さく
福音館書店
1967 年 27p
19 × 27cm



お料理と食べることが大好きな野ねずみのぐりとぐらは、ある日、森で大きなたまごを見つける。読みつがれてきたシリーズの 1 冊目。

● くろねこかあさん

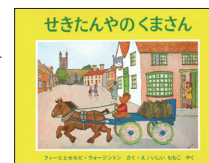
東 君平 さく
福音館書店
1990 年 24p
22 × 21cm



くろねこが生んだ、3 匹のしろねこと 3 匹のくろねこ。お昼寝したり、お皿をなめたり。弾むような文章に白黒の切絵が目を惹く。

● せきたんやのくまさん

フィービとセルビ・ウォージントン さく・え
いしい ももこ やく
福音館書店
1979 年 32p
15 × 19cm



石炭を荷馬車に積んで売り歩くくまさんの 1 日。どかんと石炭袋を置いて「200 えんいただきます」。シリーズにはパン屋や植木屋も。

● だるまちゃんとてんぐちゃん

加古里子 さく・え
福音館書店
1967 年 27p
19 × 27cm



だるまちゃんは友だちのてんぐちゃんのようなうちわやぼうしが欲しくなる。うちに帰って、大きなだるまどんに相談してみると……。

●ちいさいしょうぼうじどうしゃ

ロイス・レンスキー
ぶん・え
わたなべしげおやく
福音館書店
1970年 48p
19×22cm



かん かん かん かん！ 消防士のスモールさんとちいさいしょうぼうじどうしゃが大活躍。ポンプ車の仕組みや消防士の仕事もわかる。

●ちいさなうさこちゃん

ディック・ブルーナ
ぶん・え
いしいももこやく
福音館書店
1964年 25p
17×17cm



ふわふわさんのおうちに生まれたうさこちゃんを、にわとりやうしが次々にお祝い。太い描線と原色の絵が人気のシリーズ1冊目。

●ちいさなねこ

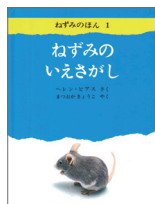
横内 襄え
石井桃子さく
福音館書店
1967年 27p
19×27cm



ひとりで家を飛び出した小さなねこ。車にひかれそうになったり、犬に追いかけられたり。聞き手と一緒に、ハラハラドキドキ。

●ねずみのいえさがし (ねずみのほん1)

ヘレン・ピアス さく
まつおか きょうこやく
童話屋
1984年 18p
21×16cm



ねずみが家を探している。バケツは広すぎるし、火の前は熱すぎる。リズムカルな文章のくり返しと素朴な写真が魅力のシリーズ3冊の1作目。

●はらぺこあおむし

エリック・カール
さく・え
もりひさしやく
偕成社
1976年 25p
22×30cm



卵からボンと生まれたあおむし。月曜日、りんごを1つ食べてもお腹はぺっこぺこ。蝶になるまでを鮮やかなコラージュで描く仕掛け絵本。

●もりのなか

マリー・ホール・エッツ
ぶん・え
まさきりこやく
福音館書店
1963年 39p
19×26cm



ぼくが森に散歩に行くとライオンがついてきた。ゾウもクマもウサギも1列になって、静かな森を歩いていくと……。続編に『またもりへ』。

●わたしのワンピース

にしまき かやこ え・ぶん
こぐま社
1969年 43p
20×22cm



空から落ちてきた白いきれで仕立てたワンピース。「ララン ロロン わたしににあうかしら」花畑では花柄に。雨のときは水玉模様。

5歳～

●イエペはぼうしがだいすき

石亀泰郎 写真
文化出版局編集部 文
文化出版局
1978年 40p
23×22cm



デンマークに住むイエペは3歳。ぼうしを100ももっていて、保育園でもかぶってる。大好きなものがある子どもをとらえた写真絵本。

●いたずらきかんしゃちゅうちゅう

バージニア・リー・
パートン ぶん・え
むらおか はなこやく
福音館書店
1961年 45p
31×23cm



ある日、機関車ちゅうちゅうは、重い客車を外して1人で走り出した。踏切を抜け、はね橋を飛び越え。スピード感あふれる絵とお話。

●うれしいさんかなしいさん

まつおか きょうこ さく・え
東京子ども図書館
2012年 48p
22×19cm



にこにこ顔のうれしいさん。頭をぶつけていぺんかなしいさん。表紙と裏表紙両方から話が進む。人形遊びから生まれた絵本。

●おおきなおおきなおいも—— 鶴巻幼稚園・市村久子の教育実践による

赤羽末吉 さく・え
市村久子 案
福音館書店
1972年 88p
22×16cm



芋掘り遠足が雨で延期になった幼稚園で、子どもたちが描いた大きな大きなお芋。そのお芋で何を作る？ 食べたら？ 愉快なほら話。

●おいしいのぼうけん

たばた せいいち、
ふるたたるひさく
童心社
1974年 79p
27×19cm



さくら保育園のさとしとあきら。昼寝前にけんかして、叱られて押し入れにいれられ、恐ろしいねずみばあさんに出会ってしまう。

● おやすみなさいフランス

ガース・ウィリアムズ え
ラッセル・ホーバン ぶん
まつおか きょうこ やく
福音館書店
1966年 31p
26 × 21cm



7時はフランスの寝る時間。でも部屋にトラや大男がいて、眠れない。柔らかいタッチの鉛筆画が子どもの共感を呼ぶ。続編あり。

● かもさんおとおり

ロバート・マックロスキー
ぶん・え
わたなべ しげお やく
福音館書店
1965年 64p
31 × 23cm



カモのマラードおくさんは8羽の子ガモを連れて公園の池へ。おまわりさんが交通整理してくれ大通りを得意気に行進。ポストンが舞台。

● きつねのホイティ

シビル・ウェッタシンハさく
まつおか きょうこ やく
福音館書店
1994年 44p
31 × 23cm



きつねのホイティは食いしんぼう。変装して村のおかみさんたちの夕飯にありついたものの……。くり返しの歌が楽しいスリランカの絵本。

● くんちゃんのだいいりょう

ドロシー・マリノ 文・絵
石井桃子 訳
岩波書店
1986年 35p
26 × 20cm



冬、南の国に渡る鳥たちに憧れた子ぐまのくんちゃん。自分もついでにこうと丘をのぼるが……。シリーズには、学校やキャンプのお話も。

● げんきなマドレーヌ

ルドウィッヒ・
ベームルマンス 作・画
瀬田貞二 訳
福音館書店
1972年 47p
31 × 23cm



パリの寄宿学校に住む12人の女の子たち。いちばんおちびで元気なマドレーヌが、ある晩、わーわー泣き出して……。シリーズ1冊目。

● こぎつねコンとこだぬきポン

二俣英五郎 画
松野正子 文
童心社
1977年 47p
26 × 26cm



つばき山のこぎつねコンとすぎの木山のこだぬきポン。友だちになりたい2人だけど親は大反対。きつねとたぬきは仲よくなれない？

● 11匹きのねこ

馬場のぼる 著
こぐま社
1967年 39p
27 × 19cm



いつも腹ペコの11匹のねこ。湖に大きな魚がいて聞き、行ってみると、怪物みたいな魚が飛び出した。捕まえるには？ 続巻あり。

● しょうぼうじどうしゃじぶた

山本忠敬 え
渡辺茂男 さく
福音館書店
1966年 27p
19 × 27cm



ジープを改良した小さな消防車のじぶたは働き者。ちびっこの自分と立派な消防車を比べて落ちこんでいたとき、山火事が起き……。

● すてきな三にんぐみ

トミー・アンゲラー さく
いまえ よしとも やく
偕成社
1969年 38p
30 × 22cm



黒マントに黒い帽の3人組。人々をおどして金銀財宝を盗み出す。ある晩盗んだのは小さな女の子。宝を何に使うのと聞かれて……。

● せいめいのれきし—地球上に せいめいがうまれたときからいままで のおはなし 改訂版

バージニア・リー・
バートン 文・絵
いしいももこ 訳
まなべ まこと 監修
岩波書店
2015年 80p
25 × 26cm



太陽と地球が生まれ、海で育まれた生物は進化を遂げ、植物、恐竜、哺乳類が登場。現在の私たちにつながる壮大な歴史を5幕の芝居で語る。

● チムとゆうかなせんちょうさん (チムシリーズ1)

エドワード・アーディソーニ
さく
せたていじやく
福音館書店
2001年 48p
27 × 20cm



船乗りになりたくてたまらないチム。ある日こっそり汽船に乗りこむ。船長たちに一人前と認められて、航海するが……。続編あり。

● どうぶつえんのおいしゃさん

降矢洋子 さく
増井光子 監修
福音館書店
1982年 28p
25 × 22cm



シマウマの爪切り、キツネの結膜炎の治療、便秘のゾウの糞を出す。お医者さんはそれぞれの動物にあった治療を工夫して、病気を治す。

● どろんこハリー

マーガレット・ブロイ・
グレアム え
ジーン・ジオンぶん
わたなべしげおやく
福音館書店
1964年 32p
31×22cm



ハリーは黒いぶちのある白い犬。お風呂がきらいで、ブラシを隠して家出したところ、泥んこになり白いぶちのある黒い犬に。続編あり。

● はるにれ

姉崎一馬 写真
福音館書店
1981年
32p 27×20cm



晴れの日も、雪の日も、ただじっとそこに立ち続けるはるにれの木。1本の太木の四季折々の姿をおさめた、文字のない写真絵本。

● ピーターラビットのおはなし (ピーターラビットの絵本1)

ビアトリクス・ポター さく・え
いしいももこやく
福音館書店
1971年 55p
15×12cm



ピーターラビットは、言いつけを聞かず、マグレーガーさんの畑に入りこんで追いかけれられ、靴も上着も失くしてしまう。シリーズ1冊目。

● ひとまねこざるとときいろいぼうし

H・A・レイ 文・絵
光吉夏弥 訳
岩波書店
1983年 55p
28×22cm



アフリカから都会へ連れてこられたじょうじ。知りたがり屋で困った羽目に陥るが、仲よしのおじさんがいつも助けてくれる。続編あり。

● ピン・ボン・バス

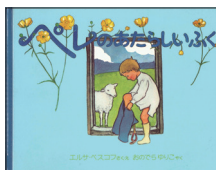
鈴木まもる 絵
竹下文子 作
偕成社
1996年 32p
21×26cm



バスが駅前を出発。「ピンボン」学校の前に止まると、子どもたちが乗ってくる。上り坂を山のほうへ。運転手になった気分で楽しめる。

● ペレのあたらしいふく

エルサ・ベスコフ
さく・え
おのぞり ゆりこやく
福音館書店
1976年 15p
24×32cm



ペレは自分の子羊の毛を刈りとり、おばあちゃんやお母さん、仕立て屋さんの手を借りて服を作る。スウェーデンの素朴な古典絵本。

● まりーちゃんとひつじ (岩波の子どもの本)

フランソワーズ 文・絵
与田準一 訳
岩波書店
1956年 64p
21×17cm



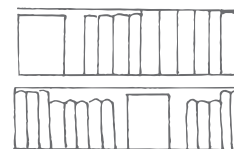
まりーちゃんとひつじのばたぼんがお話する。「はらっぱには、ひなぎくのはながきれいきれい」歌うような言葉と素朴な絵に心が和む。

● りんごのき

ヘレナ・ズマトリーコバーエ
エドアルド・ベチシカ ぶん
うちだりさこやく
福音館書店
1972年 27p
18×18cm



冬には棒のようだった庭のりんごの木に花が咲き、秋には実が1つなった。男の子のマルチンが両親と木の世話をする1年を静かに綴る。



ことばあそび

● かえるがみえる

馬場のぼる え
まつおか きょうこ さく
こぐま社
1975年 39p
18×18cm



かえるがみえる、かえるにあえる、かえるははえる、かえるがほえる……。ユーモラスな絵をそえた言葉遊び。声に出して読んでみよう。

● ことばあそびうた

瀬川康男 絵
谷川俊太郎 詩
福音館書店
1973年 35p
23×14cm



「はなののののはな はなのななあに」「いるかいるか いなかいるか」など全15編のうた。くり返し声に出して読むと楽しい。

● これはのみのぴこ

和田 誠 絵
谷川俊太郎 作
サンリード
1979年 31p
29×22cm



「これはのみのぴこ」、「これはのみのぴこのすんでいるねこのごえもん」。見開きごとに言葉が重なり増えていく、言葉遊び絵本。

昔話

● いっすんぼうし

あきのふくえ
いしいももこ ぶん
福音館書店
1965年 40p
21 × 22cm



親指ほどの大きさで生まれたいっすんぼうし。都の大臣の家に雇われ、姫と出かけた清水寺で鬼に出くわす。絵巻風の絵が美しい。

● おおかみと七ひきのこやぎ ——グリム昔話

フェリクス・ホフマンズ
グリム兄弟 再話
せたていやく
福音館書店
1967年 32p
22 × 30cm



こやぎたちが留守番していると、お母さんのふりをしたおおかみがやってくる。落ち着いた色調の絵でお話の世界が手にとるように見える。

● おおきなかぶ——ロシアの昔話

佐藤忠良 画
A・トルストイ 再話
内田莉紗子 訳
福音館書店
1966年 27p
20 × 27cm



おじいさんが植えたかぶが途方もない大きさに。1人では抜けない。おばあさんと「うんとこしょどっこいしょ」それでも抜けない。

絵本

● おだんごばん——ロシアの昔話

わきたかずえ
せたていやく
福音館書店
1966年 24p
31 × 22cm



おばあさんが作ったおだんごばんが、ころころがってウサギに会う。「ぼくはてんかのおだんごばん」と歌って逃げ出して……。

● かにむかし——日本むかしばなし

清水崑 絵
木下順二 文
岩波書店
1976年 44p
33 × 26cm



猿蟹合戦で有名な昔話。「かににどんかにどんどこへゆく」「さるのばんばへあだうち」のくり返しが心地よい。漫画家の絵が味わい深い。

● 三びきのやぎのがらがらどん ——ノルウェーの昔話

マーシャ・ブラウン
アスピョルセン、モー 再話
せたていやく
福音館書店
1965年 32p
26 × 21cm



大、中、小の3匹のやぎ、名前はどれもがらがらどん。山の草場で太ろうと橋を渡ると、トロールが「ひとのみにしてやるぞ」とどなる。

● だいぐとおにろく——日本の昔話

赤羽末吉 画
松居直 再話
福音館書店
1967年 27p
20 × 27cm



流れの急な川に橋架けを頼まれた大工の前に鬼が現れ、目玉をよこしたら架けてやるという。名あての話。墨絵と大和絵風の絵が魅力。

● てぶくろ——ウクライナ民話

エウゲーニー・M・
ラチョフエ
うちだりさこやく
福音館書店
1965年
16p 28 × 22cm



おじいさんが森で落とした手袋に、くいしんぼねずみが住みつき、びよんびよんがえるや、はやあしうさぎもやって来て、ぎゅう詰めに。

● ふしぎなたいこ ——にほんむかしばなし (岩波の子どもの本)

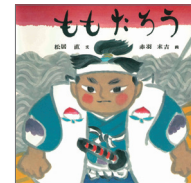
清水崑 画
石井桃子 ぶん
岩波書店
1953年 68p
21 × 17cm



人の鼻を高くしたり低くしたりできる太鼓の持ち主、げんごろうさん。ある日、どこまでも鼻を伸ばしたら……。他2編。軽妙な墨絵。

● ももたろう

あかばすえきちえ
まついただしぶん
福音館書店
1965年 40p
21 × 22cm



桃から生まれたももたろう。日本一のきびだんごをさげて、犬、猿、キジをお供に鬼ヶ島に鬼退治へ。有名な昔話を美しい日本画で伝える。

お話集

● イギリスとアイルランドの昔話

石井桃子 編訳
ジョン・D・バトン 画
福音館書店
1981年 333p
22 × 16cm



語り継がれてきた「三びきの子ブタ」、「ジャックとマメの木」等。イギリスから22編、アイルランドから8編の多彩な昔話を収録。

● エパミナンドス (愛蔵版おはなしのろうそく1)

東京子ども図書館 編・刊
大社玲子 絵
1997年 183p
16 × 12cm



聞いて楽しめる世界各国の昔話や創作物語を11編収録。「エパミナンドス」はトンチンカンなことばかりしかかす男の子。シリーズ12巻。

●子どもに語るグリムの昔話 1

ヤーコブ・グリム、
ヴィルヘルム・グリム再話
佐々梨代子、野村 沅 訳
ドーラ・ボルスター 挿絵
こぐま社
1990年 188p
18×14cm



グリム兄弟が集めたドイツ語圏の昔話。「おいしいおかゆ」「ホレおばさん」など12編。読んでもらって楽しんでほしい。全6巻。

物語

●いやいやえん

中川李枝子 さく
大村百合子 え
福音館書店
1962年 180p
22×16cm



いたずらっ子のしげると、ちゅーりっぷ保育園の元気な子どもたちのお話7編。親しみやすい絵も相まって、子どもの圧倒的支持がある。



●エルマーのぼうけん

ルース・スタイルス・
ガネット さく
わたなべしげおやく
ルース・クリスマン・
ガネット え
福音館書店
1963年 118p 22×16cm



囚われのりゅうを助けるためどうぶつ島に出かけたエルマー。リュックに詰めたチューイングガムやブラシでピンチを乗り切る。全3巻。

●大どろぼうホッツェンプロッツ

オトフリート・プロイスラー 作
中村浩三 訳
F・J・トリップ さし絵
偕成社
1966年 184p 23×16cm



おばあさんの特別なコーヒーひきが、大泥棒ホッツェンプロッツに盗まれた。カスパールとゼッペルはとり戻そうと奔走。全3巻。

●きえた犬のえ (ぼくはめいたんてい)

マージョリー・ワインマン・
シャーマット ぶん
光吉夏弥 やく
マーク・シーモント え
大日本図書
2014年 62p
22×16cm



名探偵ネートのもとに仲よしのアニーから依頼が舞いこむ。「黄色い絵の具で描いた犬の絵を探してほしい」。シリーズ1冊目。

●クマのプーさん プー横丁に たった家

A・A・ミルン 作
石井桃子 訳
アーネスト・H・シェパード
さし絵
岩波書店
1962年 400p 23×16cm



クリストファー・ロビンという男の子とぬいぐるみのクマのプーやコブタたちが森で巻き起こす愉快なお話。英国のファンタジー。

●ジェニーとキャットクラブ (黒ネコジェニーのおはなし 1)

エスター・アベリル 作・絵
松岡享子、張替恵子 共訳
福音館書店
2011年 120p
20×14cm



内気なジェニーは、憧れのキャットクラブに誘われたのに怖くて逃げ出す。でもスケートをものにし、勇気を奮って仲間入り。全3巻。

●チム・ラビットのぼうけん

アリソン・アトリー 作
石井桃子 訳
中川宗弥 画
童心社
1967年 190p
22×16cm



ウサギの男の子チムが、森の小動物やカカシと繰り広げるお話9編。田園の光や匂いが溢れる。続編に『チム・ラビットのおともだち』。

●なぜなぜのすきな女の子

松岡享子 さく
大社玲子 え
Gakken
2023年 62p
23×19cm



なぜなぜの相手を探しに森へ出かけた女の子。おなかを空かせたオオカミに出くわしてなぜなぜを持ちかける。楽しいなぜなぜがいっぱい。

●なんでもふたつさん

M・S・クラッチ ぶん
光吉夏弥 やく
クルト・ビーゼ え
大日本図書
2010年 64p
22×16cm



名前どおり、服も家も仕事まで2つ持たなくては気のすまない“なんでもふたつさん”。妻も息子も2人持とうとする。挿絵も楽しい。

●番ねずみのヤカちゃん

リチャード・ウィルバー さく
松岡享子 やく
大社玲子 え
福音館書店
1992年 70p
22×19cm



声が大ききねずみのヤカちゃん。家の人間に見つかりそうでお母さんねずみときょうだいは毎日ヒヤヒヤ。ある日泥棒がやって来て。

子どもと本をつなぐ方に、おすすめの本

- 『えほんのせかい こどものせかい』（文春文庫） 松岡享子著 文藝春秋 2017年
- 『新編 子どもの図書館』（石井桃子コレクション3）石井桃子著 岩波書店 2015年
- 『幼い子の文学』（中公新書） 瀬田貞二著 中央公論新社 1980年
- 『子どもと本』（岩波新書） 松岡享子著 岩波書店 2015年
- 『子どもと本をつなぐあなたへ——新・この一冊から』
「新・この一冊から」をつくる会編 東京子ども図書館 2008年

この冊子の製作にあたり、以下の家庭文庫、地域文庫、園文庫を
取材させていただきました。心よりお礼申し上げます。

たんぼぼ保育園（福島県郡山市）

しらさぎ幼稚園（埼玉県さいたま市）

麗和幼稚園（埼玉県さいたま市）

風渡野文庫（埼玉県さいたま市）

きりん文庫（千葉県千葉市）

けぐり文庫（千葉県千葉市）

社会福祉法人芳雄会 ふたば保育園、みのり保育園（千葉県浦安市）

みなと幼稚園（東京都港区）

NPO 法人 読み聞かせネットワークヒッポ（東京都大田区）

子どもの本の家ちゅうりっぷ（東京都杉並区）

あすなろ文庫（東京都小平市）

はらっぱ文庫（東京都小平市）

そのおき子ども文庫（長野県長野市）

子ども文庫 Pippi&Lotta（鳥取県鳥取市）

編集担当者

（公財）伊藤忠記念財団：池辺昌和 野尻夏帆◆ 二瓶紀子

（公財）東京子ども図書館：杉山きく子（風渡野文庫主宰）◆ 吉田真理●

（◆は執筆者、●はイラスト・デザイン）

公益財団法人 伊藤忠記念財団



伊藤忠記念財団は、1974年9月30日、青少年の健全育成を目的に伊藤忠商事株式会社によって設立されました。以来、設立の翌1975年4月に開始され現在まで続く子ども文庫助成事業や、1977年5月から2011年3月まで続いた東京小中学生センター（児童館）の運営を通して、多くの子どもたちの成長を見守ってきました。

2010年度からは電子図書普及事業を新設し、紙の本での読書が困難な子どもたちの読書支援のため、児童書を電子化（マルチメディア DAISY 規格）し、「わいわい文庫」という愛称で全国の学校や図書館などへ寄贈しています。

〒107-0061 東京都港区北青山2-5-1

Tel. 03-3497-2651 Fax. 03-3470-3517 URL <https://www.itc-zaidan.or.jp>



公益財団法人 東京子ども図書館

石井桃子記念 かつら文庫

東京子ども図書館は、子どもの本と読書を専門とする私立の図書館です。子どもたちへの直接サービスのほかに、“子どもと本の世界で働くおとな”のために、さまざまな事業を行っています。1950年～60年代に東京都内4ヵ所ではじめられた家庭文庫が母体となり1974年に設立しました。そのうちの1つで、石井桃子さんが設立したかつら文庫（杉並区荻窪）は、現在も当館の分室として活動を続けています。子ども向けに読み聞かせや貸出、「おはなしのじかん」を行っているほか、おとなの方には、石井さんの書斎、全国の子ども読書推進グループの活動を紹介する「マップのへや」などもご覧いただけます。



かつら文庫 上：外観（池田写真工房撮影）
下：読み聞かせ

〒165-0023 東京都中野区江原町1-19-10

Tel. 03-3565-7711 Fax. 03-3565-7712 URL <https://www.tcl.or.jp>





子どものための文庫の手引き ——小さな図書室をつくりたいあなたへ

2025 年 2 月 4 日 発行 非売品

発行者・著作権所有：

公益財団法人 伊藤忠記念財団

〒107-0061 東京都港区北青山 2-5-1

Tel. 03-3497-2651 Fax. 03-3470-3517

公益財団法人 東京子ども図書館

〒165-0023 東京都中野区江原町 1-19-10

Tel. 03-3565-7711 Fax. 03-3565-7712

印刷・製本：磯崎印刷株式会社

本冊子の内容を無断で転載・複写・利用すると著作権上の問題が生じます。ご希望の方は上記に必ずご相談ください。